

趣旨説明

サクライ ヨウコ
櫻井 陽子

過去から現在に至るまで、世界中で常にいくさ・戦争は起きてきた。哀しいことに、常態化していると言いきかもしれない。そうであるならば、文学も芸術もそこを避けて通ることはできない。私たちは、「いくさ」「戦争」をどのように言葉や絵画や音楽や映像などで表現してきたのか、何を問題として表現するのか、など考え続ける必要がある。

今年度の企画として「いくさ」を主軸に据えると決まったのは1年前（2017年）の11月であった。朝鮮半島の動きが緊張感を増していた時で、1年後は一体どうなっていることかと心配ではあった。幸いにも、現在はひところのような緊張状態は和らぎ、ひとまず落ち着いている。とは言っても、このような不安定な時代だからこそ、必要な企画であろう。

今回御登壇をお願いした三人の先生方は、研究ジャンルも、対象とする時代も作品も、全く異なる。タイトルは「いくさ」としたが、たとえば、近現代を考える時には「いくさ」ではなく「戦争」である。用語が異なるだけでなく、その指し示す概念も異なる。「表象」の手段も言葉・文字だけではない。従って、各報告は多岐にわたり、接点を捜すことにも困難が予想された。しかし、だからこそ、お三方の問題意識と報告をつなぐことによって、多様な観点から、人間の行ってきた愚かな行為がどのように表現され、何を表象してきたのかを振り返ることができるのではないだろうか。そして、過去から未来に向けたベクトルの中で、何をどのように考えていくべきか、様々に思索するきっかけを与えていただけると期待された。

口火を切っていただいた中川成美氏の専門は日本近代文学・文化の研究である。日本近代文学におけるモダニティをめぐる諸問題やジェンダー・スタディーズ、20世紀日本人の海外体験など、その研究対象は多岐にわたり、研究活動を国外にも広められている。今回も、世界的視野からアプローチをかけていただくこととなった。

二番目の金容澈 (KIM Yongcheol) 氏は美術史を専門とする。岡倉天心、近代日本の戦争画などについての研究を中心に、中国、韓国、台湾を含めた東アジアの近代美術に関しても様々に取り上げていらっしゃる。昨年、当館で行われた「東アジアにおける知の往還」フォーラムにおいて、『『蒙古襲来絵詞』の図像の伝承と変容』というタイトルで発表された。今回は更に発展させて、中世の絵画作品が近代になってどのように注目されてきたのか、といった点から発表していただけることとなった。

最後の天津雄一氏の専門は日本中世文学で、特に軍記物語の研究を中心とする。軍記物語の様々な作品の言語表現が持つ欺瞞、制度や権力などの共同体との関係、また、軍国主義や政治体制に反応してきた研究状況の歴史など、中世に限らず、近代に至るまで幅広い視野のもと、多角的に研究を進めていらっしゃる。今回は軍記物語の描く戦場やいくさの描写・表現が孕む問題について、『平家物語』を中心に、ヨーロッパの叙事詩などにも眼を配ったご発表をお願いすることができた。

お一人30分ほどで報告をお願いし、休憩を挟み、発表者同士での質問や意見を交換する形で討議を行い、残りの時間を、フロアーからの発言も含めた、総合的なディスカッションにあてることとした。